



## 生涯一書生

大村悦二\*

当時東京学芸大学教授をされていた安良岡康作先生（現在専修大学教授）の解説と、綱島初子さんの朗読で『方丈記』の講読を聴いたのは、大学一年の秋のことであった。四畳半の下宿の片隅で、ラジオから流れるこの古典講読に一人静かに耳を傾けた。落ち着いた口調で淡々と語られる安良岡先生の深みと味わいのある解説によって、私は『方丈記』の世界にすっかり引き込まれてしまった。しかも、綱島さんの力強い響きのある朗読は、和漢混淆文にぴったりマッチして、実にすばらしいものであった。

もし、念仏ものうく、読経まめならぬときは、みづから休み、みづからおこたる。さまたぐる人もなく、また恥づべき人もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとりをれば、口業を修めつべし。かならず禁戒をまもるとしもなくとも、境界きやうがいなければ、何につけてかやぶらん。

もし、跡の白波に、この身を寄する朝あしたには、岡の屋に、行き交ふ船を眺めて、満沙まんしゃ弥が風情をぬすみ、もし桂の風、葉を鳴らす夕ゆふべには、濤陽しんやうの江をおもひやりて、源都督げんととくの行ひをならふ。もし、余興あれば、しばしば、松の響に、秋風楽しゅうふうらくをたぐへ、水の音に、流泉の曲をあやつる。芸は、これつたなけれども、人の耳をよるこぼしめんとにはあらず。独り調べ、独り詠じて、みづから情こころをやしなふばかりなり。

特にこの一節には深い感動を覚え、綱島さんの朗読をテープにとって何度も繰り返し聴いた。やがてはその口調をまねて朗読できるまでになった。その後も『方丈記』は時々取り出して読んでいたが、この一節は私の最も愛読する箇所と

なっている。

よく知られているように、『方丈記』の根底を流れる思想は、無常観的人生観である。長明が、度重なる天変地異や社会の変動を体験し、孤独で寂しい境遇を生きてきたことによって、次第に固めさせられるに至った思想といわれる。無常の世の苦悩を乗り越える道として、長明は日野山に方丈の庵を結ぶ。『方丈記』には、そこに至るまでの体験と、方丈の庵における閑居の生活が描かれている。無常観とか隠棲とかいうとどこか暗いイメージを伴うものであるが、『方丈記』にはそんな暗さはなく、むしろ、明るいほのぼのとした安らぎの味わいさえ感じられる。前半において、天変地異による悲惨な状況の描写が、写実的で迫力のあるものになっているだけに、後半の閑居生活の趣が一層晴朗なものとなって伝わってくるのであろう。「田園交響曲」の第4楽章から第5楽章にかけての雰囲気ふんぎに似たところがある。

先にあげた一節からもわかるように、日野山における長明の生活は、仏道一筋の厳しい修業の日々といったものではなく、仏道を修めつつ詩歌管弦に心をなぐさめるという自由で安らぎのあるものであった。そして、そのような生活を通して、自然の美しさを再発見し、自らを心静かに見つめなおすことができたことに悦びを見出したのである。渡部昇一氏は『続 知的生活の方法』の中で、「知的生活は毎日の生活の質のことである。毎日のライフ・スタイルである。根本的には内省的気分に入る時間を持つ生活である」と述べている。方丈の庵において長明が実践した生活は、その意味で知的生活であったのであり、彼の到達した境地は、知的生活によって得られる安らかな心の世界であったと考えてよいのではないだろうか。だからこそ、方丈の庵において『無名抄』や『発心集』

\*大村悦二 (Etsuji OHMURA), 大阪大学溶接工  
学研究所, 助手, 工学博士, 精密工学

といった著作をまとめることができたと思うし、何よりも、『方丈記』のようなすぐれた作品を著すことができたと思うのである。

学生時代に出会い、今なお余韻を留めている作品といえば、吉川英治の『宮本武蔵』もその一つである。孤剣を魂とみてこの一腰に生き、常に自分を研いて、どこまで己を人間として高め得るかやってみようと、青年武蔵が剣禅一如の境地を求め続けていく姿、そこに青春時代の一つの理想的な生き方があると感じ、夢中になって読んだことを今でも記憶している。佐々木小次郎との対決を前にして、夢想権之助と本阿弥光悦が言葉を交す場面がある。

『武蔵様も、凡質とは思われませんが』

『いや決して、天稟の才質ではありませんまい。その才分を自ら<sup>たの</sup>恃んでいる風がない。あの人は、自分の凡質を知っているから、絶えまなく、研こうとしている。人に見えない苦しみをしている。それが、何かの時、<sup>しやうぜん</sup>鏘然と光って出ると、人はすぐ天稟の才能だという。——勉めない人が自ら<sup>らんた</sup>懶惰をなぐさめてそういうのですよ』

この光悦の言葉は、吉川英治の武蔵像をよく表していると思う。『宮本武蔵』にしてもその後読んだ『新書太閤記』にしても、そこに描かれた武蔵や青春期の秀吉は、決して完成された人間ではなく、未完成であるが故に自己をどこまでも研こうとして苦悩し、修練する一人の人間である。彼らの生き方の中に吉川英治の人生観を伺い知ることができ、これらの作品を通して彼の人柄に惹かれたのも事実である。成長しきった竹よりも、一皮一皮脱しながら天に向かって真直に伸びていくみずみずしい若竹の姿を愛する、吉川英治はそんな人だったのではないかと思う。

光陰矢の如し。学を志して故郷を出てからすでに十三年という歳月が流れた。その間どれほど学問を修め、人間としてどれだけ成長したかを省みると、全く恥しい限りである。その点では決して満足のいくものではなかったが、九年間を学生として過ごせたことは大変な幸せであった。こうして学生時代を振り返ってみると、

大人が少年時代を懐かしみ、子供の持つ純真さに憧れるのと似た感慨を覚える。学生であることは実に素晴らしいことだと思う。まず、青春期の躍動する若さと情熱がある。野に放たれた若駒が、陽光の中で飛ぶがごとくに馳せ回る姿にも似ている。柔軟であるから、書を読んでも、砂地に水をまくようにどンドン吸収される。これという特定の目的に束縛されることもなく、得失もないから、純粹に深く思索することができる。『福翁自伝』において、福沢諭吉は緒方洪庵の塾で蘭学を学んだ頃のことを楽しく回顧しているが、その中に次のような一文がある。

ただ昼夜苦しんで六かしい原書を読んで面白がっているようなもので、実に訳けのわからぬ身の有様とは申しながら、一步を進めて当時の書生の心の底を叩いてみれば、おのずから楽しみがある。

「無用なる学問の用」の重要性はよくいわれることであるが、学生にとっての学問は、まさにこの無用なるものであってよいわけで、それに打ち込むことによって「心の底を叩いてみれば、おのずから楽しみがある」という心境にもなれると思うのである。

浅才にもかかわらず、こうして研究者として機会を授かった以上、少しでも立派な研究ができるように日々精進しなければならないのはもちろんである。が、同時に、自分の内面的生活が充実したものとなるよう努めることも重要だと考える。専門としての研究と、無用なる学問との調和された知的生活を実践することができれば、境涯や生き方は異なるけれども、鴨長明が到達したような安らかな心の世界に通じていくような気がする。吉川英治の遺墨の中に、「生涯一書生」というのがある。これは彼が座右の銘にした言葉である。「三十なお学生、四十なお人生の一学生、五十まだ学んで足りないだろう。」彼はこのように述べている。吉川英治には及ぶべくもないが、私自身も「生涯一書生」をモットーにし、知的生活を心掛けてこれからの人生を歩んでいきたいと思う。

終わりに、本欄への執筆を勧めて戴いた井上勝敬教授に深く感謝の意を表す。